

名古屋で東アジア文化財をみるということ

東洋考古学が専門の私は、かれこれ二十年間近く中国を中心に、アジア各地をウロウロと調査・見学しています。ことに頻繁に出かける中国では、都市部だけでなく、郊外や農村地域に所在する遺跡や文化遺産においても、年々、様子が目覚ましく変わっていくのがわかります。時代が移りゆくなかで、文化遺産の原風景を知りうる資料は、考古学的な出土文物であり、民俗資料や工芸品であり、古写真であり、また近現代以前の研究者たちが遺した記録や著作です。それらを踏まえて実際に現地に立ち、実地の見学と観察を通して、元々の景観はどのようであったか、この文化遺産の立地はなぜこの場所なのか、過去の時代ここにどんな人々がどのように関わり活動したのか…、さまざまに考えをめぐらせませす。現地に立ち、あるいは実物に触れることで、それぞれの文化遺産の背景にある歴史と文化、原風景などのイメージを肌で感じるができます。

館蔵 東アジア文化財の特徴

名古屋市博物館は主に名古屋と尾張の歴史をテーマとする博物館ですから、海外である東アジアの文化財を積極的に収集しているわけではありません。とはいえ、そんな当館でも考古資料などにくらか、東アジアに関わる文物を所蔵しています。参考資料として購入したものもあれば、個人の方から寄贈をいただいたものもあります。しかしながら博物館のテーマ性から、それらの東アジア文化財は海外の資料という扱いとなり、なかなか展示等に活用される機会が得にくいものです。

数年前から、私は東洋考古学者としての責任感から、当館が所蔵する東アジア文化財を必ずしも考古資料に限らず、積極的に調査し展示公開するよう取り組んでいます。当館所蔵の東アジア文化財にはその資料自体の重要性だけでなく、名古屋との関わりという価値があり、これらを広く知っていただかないのはもったいないと考えています。私のその思いとご縁があったか、偶然ではありますが、ここ数年の間に中国の文物・文化遺産に関係するまとまった重要な資料群をご寄贈いただく機会に恵まれました。

明治から現在にいたるまで、東アジアの文化遺産、つまり史跡や習俗あるいは文物などに関して、調査・研究や古物収集をしてきた研究者や考古学・歴史の愛好家は少なくありません。当館が所蔵する東アジア

文化財の多くは、名古屋に所縁のあるこのような人々の所有資料をご遺族や関係者からご寄贈いただいたものです。そのなかには、名著『長安史蹟の研究』で高名な中国史研究者・足立喜六氏や、法隆寺の昭和の大修理を担った建築史学者・浅野清氏など、文化遺産の世界できわめて著名な研究者に関わるものもあります。他方で、職業的な研究者ではない市井の愛好家の手による収集資料にも、松本勝弘氏収集古鏡のように地道な学習にもとづいた目でコレクションされただけで歴史を語りうる重要な資料群や、近代の民間人の歴史愛好精神をよく表すような収集品など、貴重なものがあります。

館蔵東アジア文化財に何を見出すか

学者として研究する人、元々は本職でないが現地の文化や歴史に魅せられ研究した人、個人の歴史・古物好きが昂じて収集した人など、取り組みの姿勢は人によってそれぞれ異なります。しかしながら、東アジアの文化財を通して、そこに当時の人々が躍動する歴史上のワンシーンを見つめたという点では、みな同じような思いであったにちがいません。

つまり、これらの館蔵東アジア文化財が名古屋にとっても重要であるのは、近現代の名古屋に所縁の人々が東アジア各地の歴史や文化に対して抱いた深い関心、自分たちの外側にある広い世界に向けていた視野を示していることです。これは、名古屋・尾張の未来に向けて、進取の精神や外の世界に飛び込むことの重要性を改めて提起してくれるものです。同時に歴史資料としても、現在では失われたり様相を変えてしまった史跡や、未解明の遺跡に関する貴重な情報を知りうる点で重要です。

当館所蔵の東アジア文化財は、博物館資料が過去の歴史も、現在の研究の面白さも、未来への視線も教えてくれる、ということの好例といえるのではないのでしょうか。
(藤井康隆)



館蔵東アジア資料の一部